

# アサキズム革命論の 難点をめぐって

大沢正道

梅本克己というマルクス主義哲学者が「展望」3月号に「ユートピア雑感」というエッセイを書いている。トマス・モアの「ユートピア」の面白さを、  
~~梅本はモア~~自身どうしてよいか分らない困惑がそこにふくまれているからだとして解釈している。つまりモアはユートピアを描きながら、ユートピアらしからぬ  
予防戦争論や権力支配を主張している。その矛盾のこっけいさのうちに一種独特の理想のイメージが浮ぶ、というのである。

しかし古代からのもろもろのユートピア思想の歴史を研究した「ユートピアの旅」(1950年)の著者M.L.ベルネリが鋭く指摘しているように、一口にユートピアといっても、それは一様なものではない。「各時代をつうじてユートピア思想には二つの主要な流れがみられる」のである。一方はベルネリ用語を使えば権威主義的ユートピアであり、他方は反権威主義的ユートピアである。この両者を区別するポイントが芸術家の待遇の仕方にある。芸術家に自由な自己表現を許すか、否かがポイントなのである。

モアのユートピアは、ベルネリによれば権威主義的ユートピアであり、プラトンの「共和国」以来代表的なユートピアはほとんどこの流れに属している。それゆえ、モアのユートピアのなかにユートピアらしからぬものがある、という梅本の解釈は実証性を欠いた一人台点といわなくてはならない。モアにとってはそれこそが彼の理想だったのであり、おそらく矛盾なぞ感じなかったであろう。

## 秋山・横倉 論争の問題点

ところでぼくがこんなことを書き出したのは、105号以来この欄で行なわれている秋山三喜雄と横倉辰次の論争に触れてみたかったからである。

秋山は「ユートピア主義」が社会主義本来の姿だと主張する。彼のユートピアが権威主義的なものか、反権威主義的なものか不分明だが、文脈をたどってゆくと重点は理想社会へ到達する方法論についてであろう。

横倉は、秋山のいうユートピア建設、ぼく流にいいかえれば地域的な共同村落の建設とその拡大による社会の構造的更迭の運動に対して、権力支配に対す

る見方の甘さを衝いている。これはたしかにこの理論の弱点を衝いた指摘で、107号の秋山の釈明では十分といえないだろう。

しかしそれでは横倉説に弱点がないかといえ、すくなくとも二つの決定的な弱点がある。第一は革命暴力において必然的に派生する権力の問題にどう答えるか、第二は支配権力が熱核兵器という超破壊的な暴力を所有している現実で、革命的暴力はどのような形でこれに対抗し、これを克服するかという問題である。

これはアナキズム革命論上の最大の難点であり、つまづき石でもある。たんに自由連合とか自主自治というスローガンで跳び越えられるような事柄ではない。

かつて石川三四郎が主張し、最近また埴谷雄高らが提起しているいわゆる永久革命論は、この難点に対する純粹主義的な一つの解答であろう。それはつねに権力に対して革命者の位置にいる、ということは裏返しにすれば、無権力・無支配の社会は常に理想であって現実化されないという諦念のようなものがその底辺に潜んでいるということであろう。

また、秋山のユートピア主義もじつはこの難点に対する一つの理想主義的な解答なのである。秋山はキブツや山岸会や心境部落のうちにその萌芽形態をみている。しかしほくはつねにそれらの運動のレポートを読むたびに不足を感じるのだが、それらについての社会学的なアプローチはあっても、経済学的なアプローチは非常に少ない。キブツや山岸会経済的基盤はなになのか。

フリーエ、オーエン以来の共同体建設の運動は、ほとんど農業を基盤とする運動であった。それが衰亡していったのは、ある意味かや必然であった。工業化が世界史の大勢となっている現実のなかで、その未来を先取りする解放の理論はどのようにして形成されなくてはならぬのか、これが前号で論争を蒸返せと井原未九郎が提唱した、ほくの諸論文の問題意識なのである。

## 現実主義的なアプローチはないか

井原は前号の論文で「私は自由共産、無権力社会の招来を信じない。それはむしろ不可能である」と考える。無権力社会の出現ということと、無権力への方角ということは、全然異った概念の上に成り立つものであると思う」と述べている。この前半の判断について、ほくは賛成でもあり、反対でもある。なぜこういうあいまいなことをいうかといえ、自由共産、無権力社会という観念をどのように理解するかその振幅の取り方によって、判断が変わってくるからだ。

もしそれ

351 352 それを純粹主義的に理解するならば、ほくは彼に賛成である。人類の歴史はやがて終りを告げ、真の人類の時代が到来するというようなメシア的な信仰をほくはもたない。そのかぎりではほくは、自己の位置を永久的な革命者におく見解に共鳴する。しかし、満足はしない。

石川三四郎は永久革命者としてのアナキストに敗北はない勝利あるのみ、とっている。原理的にはそうかもしれぬ。しかし現実的にはどうだろうか。理想社会は到来しないという判断から永久革命論への道筋には一つの大きな、単純な飛躍があるようにほくにはおもわれる。

その意味では「無権力社会の出現ということと無権力への方向ということとは全然異なる」という井原の意見にほくは賛成である。ほくはこの方向のなかに、アナキズム革命論がつきあつた難点に対する現実主義的な解答が求められるのではないか、とかがえている。

現実主義的であるということは、一面、折中主義的、あるいは妥協的であるということである。日本の左翼に伝統的な倫理主義は折中主義もしくは妥協に対して最も厳しい態度を取りつけてきた。しかしこの倫理主義が日本の左翼をつねに少数派集団に位置させ、理屈からいえば最大多数の民衆の支持を受けるべきであるのに、逆に民衆と意質の自己封鎖的な集団となっている根源のようにおもわれる。そしてそれは一種の千福年説的なメシア信仰が暗黙のうちに前提されているからであるまいか。

バクーニンは「破壊する情熱はまた建設する情熱だ」といったが、それはバクーニンのロマン主義的な幻想であつて、破壊即建設にはならない、とほくは考える。

しかし建設即破壊ということはいえるだろう。理想社会は到来しないとしても、その方向へ無限に接近していくことはできる。それはその方向への建設的な行動を日常的に蓄積していくことによってはじめて可能であり、ほくはその長期的な過程をつうじてアナキズム革命の展開を見てゆきたいのである。

(自由連合 第108号 昭和40年4月)

# 秋山・横倉の所論について

藤本正彦

ここ数号にわたる秋山（三）・横倉の所論に意見を述べる。

秋山の論旨は、社会主義の本来性にはユートピア主義が横たわるということである。このことは私も同感だ。

横倉の反論は、このユートピア本來說を認めない理由を明らかにしない限り無力である。第2に秋山の所論は、批判の余地が多くあってもこれからの運動論試論としてかかっているのに対して、横倉のそれは論者自身の革命運動論がかかっている。

しかし私は横倉と異った意味で、革命は暴力と独裁の要素をぬきにしてありえないと考える。暴力と独裁の概念はここではくわしくふれないが、大杉がよくかいた次のことわざをひいておく。「請い願う者は与えられず、強請する者は少し与えられ、強奪するものは全てを与えられる。」

革命行動とは合法と非合法との複合概念であり、日常性と非日常性との複合概念である。だからといって秋山が、アナキストが老人の群れにならぬために「ユートピア主義——」をかいているのに、その意味する処をみないで直ちに、「秋山が「現実の政治と関連交渉を保持しなければならない」などというのは正に無意識的スパイ行~~な~~であり反革命だ」ときめつけるのは、とんでもない。アナキストは反権威主義者であるのに、横倉は何を権威にきてこのような無責任な発言をするのか。

第2に横倉は「現実の政治と関連交渉を保持しない」のがなぜアナキズムなのかを説明する必要がある。私の知る限りアナキズムとは読んで字の如く反ボス主義であり 歴史的には反教会主義の系譜につながっている。無教会・反教会の闘争が普遍権威としての現実の教会との物理的・实际的な闘争を抜きにしてありえないのは自明であろう。そして物理的・实际的な闘争、即力関係のことを「政治」運動なり闘争なりと称することは、一般の常識である。もし力関係がいやだというのなら生命力を放棄して思想だけを保持しなければならない。私にいわせればはしのあげおろしからして、政治である。政治をとりたてて特別なものと考えたり、単に国会の中にだけあるものだと考えるのは、政治至上

主義の裏がえしでしかない。

あの12月8日から1ヶ月後に父は死んだ。いちりべラリストであった父は、2〜3の反軍国主義的論説を自己の主宰する政治紙にのせたのみで、新聞統制による廃刊、非翼議会議候補としての地方選挙の敗北、生活の窮乏化という自明の経過をたどって死んだ。私がアナキストとして反政治的政治を標榜する原型の一つはここにある。原型の他の要素は共同体意識と戦争体験である。反政治的政治の概念を老アナキスト式に概念論的には考えられぬ理由もここにある。

さてアナキズム原理を浅薄化し浅薄化することによって一片の教条主義者に墮する人はいないだろう。いないとすれば秋山(三)の所論を積極的にとりあげて批判する必要がある。秋山の議論は、第一に国家とそれの破滅の問題、第二に民族問題、第三に独裁概念の否定(ここからユートピア説がくる)第四にプロレタリアの問題、第五の唯物弁証法と形式論理学の問題がつめこまれてやや混乱しながらかかっている。国家の破滅過程については、国家有から社会有へ、またその逆で、社会有から私有と国家有を食いつぶす方法がある。秋山のユートピア説は後者であり、アナキズムの革命観も後者である。けれどもアナキズムの革命観には確固とした階級観があるのである。

確かに革命勢力とは図式的に均等的に発生するものでは断じてない。それは根拠地ともいふべき領域性を持つことで運動する。だが私はその一領域が単位ユートピアなどとは考えないし、またここで単位ユートピアの単位も明らかでない。現実とは矛盾のうえに発展する。現実になつ理論もまたしかり。関西のすぐれた革命家グループ(今のところは反代々木派の中の一部やアナキストたち)は「革命は関西から攻め上る」と考えている。根拠は、歴史的・文化的に要するに現実的に最も熟練した大衆が住むということである。

この時、われわれにはやはり領域的に革命基盤を考えている。だいたい日本人の国家・民族・政府等々の概念はヨーロッパ型からはるかに曖昧であり、理論化されていない。例えば、「政府」の概念をとりあげてみよう。ガバメントすなわち大阪市役所なり大阪政府であり、自治はそれぞれ政府に他ならない。アナキズムには自治主義・州権主義の要素があり、秋山の単位ユートピアは自治主義の思想として評価せねばならない。次に国家と民族とは概念的にも発生的にも同一ではない。私は民族を要するし他でもなく日本の革命を考えたから、日本共産党に反対してわが日本アナキスト連盟という実験のすこぶるあいまい

な集団に属したのである。すなわちここには主体性の問題、体现の問題がある、  
いかに前衛を体现しうるか、ここに革命者としての責任と任務がある。

さて、フランス革命と共に登上した「国家」とその概念は、産業資本主義  
下での国民国家であり、帝国主義段階の中で植民地主義による侵略性を高め、  
当面の国家独占資本段階で、民族国家の枠は資本家自身の手でこわされている。  
そしてプラグマチックなソビエト社会主義において全人民国家が発明されてい  
る。この概念とともに一方で社会生産力の国家有から社会有への正しい移行の  
試みがなされているのを注目しなければならない。現実とは正にこのように矛盾  
に充ちて発展するものだ。アナキストはダイナミズムをなくしてはならない。  
秋山の単位ユートピア説はこのダイナミズムを失っている。

(自由連合 1965年 第109号)